

# 在籍学級と国際教室の教員が共に考える自主勉強会

—JSL 児童が「わかった」「楽しい」と思える授業を目指して—

田嶋麻理子・笹明衣・新垣由香里・泉村美雪(川崎市立さくら小学校) 加藤香代(元川崎市立さくら小学校・早稲田大学大学院院生)

- 背景**
- ・全児童の約1割強を外国につながる児童が占める外国人集住地域の公立小学校。「取り出し児童」18名
  - ・地域に密着しており多文化共生の授業は全学年カリキュラムに位置づけられている。
  - ・JSL 児童の増加に伴い、指導・対応において在籍学級担任への負担が大きい。

- 目標**
- ・教員が情報・悩みを共有し、JSL 児童の理解・学びに活かす。
  - ・日本語教育の知見と子どもの実態からの授業創りを立場の異なる教員が共に考える。

## 異なる立場の人が共に考える勉強会

在籍学級・国際教室・特別支援学級・栄養士・サポーター

## なぜ勉強会？

多様な言語的文化的背景を持つ子どもたち  
情報共有だけではダメなの？  
誰かがやってくれるのではなく、自分が考えよう！  
子どもを多角的に見ていこう！

〈教員アンケートより〉

教科の特有なことばの理解・母語保持って何？  
漢字が覚えられない！支援方法を知りたい

〈後行シラバス〉

第1回

- アイスブレイク (ことばゼロ)
  - アンケートについて意見交換
  - 日常会話と教科で必要な言語
  - ワークショップ (カミング理論から)
- 課題: ことばをどう教えるか

みんな同じように悩んでいる

第2回

- アイスブレイク (ことばで伝える)
  - 参加者の実践・JSL 児童の様子
  - ことばの学びを支える実践
- 漢字中心に教員同士実践や悩みを話す
- 支援の方法 (スキャホールディング)
- 課題: 学習に必要な言語の支援方法

第3回

- 学習ゲーム (漢字バトル)
  - 最近の子どもの様子
  - 教材研究 (JSL カリキュラムの視点から)
- 単元名「どうぶつのお赤ちゃん」(1年)
- 課題: 他学年の教材研究・個を追って

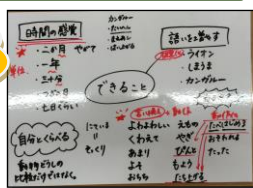
第4回

- 学習ゲーム (キーワードゲーム)
  - 教材研究 (JSL カリキュラムの視点から)
- 単元名「スーホの白い馬」(2年)
- ケース会議 (A 児)
- ・在籍学級担任・国際教室担任より A 児の長所と課題  
・課題の背景と支援方法を考える
- 課題: 次年度に向けて

次年度

- 各教員の授業実践報告 (深化)
- ケース会議 (A 児以外のケース)

## どこで困るかな



## 参加者の声

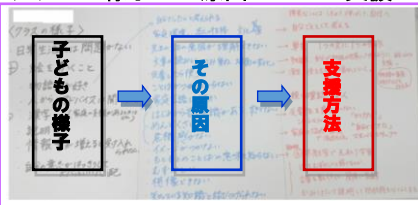
- ・話し合いは手立てがいっぱい。国際教室担任と一緒に授業を創るよさを実感。
- ・様々な悩みや考えを共有しみんなで頑張っていこうと思った。
- ・子どもについて在籍学級担任と一緒に考える機会はうれしい。(国際教室)
- ・手立てを交流する中で自分の手立てはどうだったか振り返る機会になった。
- ・他の先生の話の聞いた自分はちょっと手を加え過ぎていたと感じた。(在籍学級)

発展: 在籍学級・国際教室での実践

視覚教材・ことばの支援・例示  
具体物・連携の大切さを実感!

## 個の支援

クラスの様子 原因 支援



子ども一人一人に  
合わせて支援方法  
を考える

## 参加者の声

- ・学級担任は他にもたくさん課題を抱えている子どもがいる中で、外国につながる子どもに目を向ける時間が増えたことはうれしい。
- ・子どもが身近な存在になった。「食育」の授業をする際、本当に教えたいことは何かことばを選んで伝えたい。(栄養士)
- ・一人の児童を取り上げ具体的な悩みや手立てを考えることで一人では気づかなかった視点を持つことができた。(在籍学級)
- ・文化背景がことばの問題から見極めが必要だと思った(特別支援学級)

## 成果

漠然としていた  
JSL 児童の視点  
が明確化された

## 課題

場・時間の確保  
全体への広がり

- 外国につながる子どもについて共に考える校内コミュニティの構築
- 自分が安心してつながれる「話せる場」
- 一人ではなかなかできないことでも仲間とやってみると行動に移せる
- ユニバーサルデザイン
- UD 考え方は、どの子どもにとっても「分かった」「楽しい」授業につながる

勉強会の意義